

プロテイノスにおける「魂の降下」について

金井多津子

一 魂の降下についての問いの端緒

プロテイノスの思想については、Zeller⁽¹⁾以来、次の二つの側面があることが言われてきた。一つは「ト・ヘン」から「ヌース」、「ヌース」から「プシューケー」という三つの原理的なものの発出の過程によって宇宙の生成を説明しようとする側面であり、いま一つは、われわれ各自の魂の「ト・ヘン」への還帰と合一という側面である。そして、これら二面がいわば相即するものとしてプロテイノスの思想の基本的枠組みをなしているということが、多くの研究者によって指摘されている⁽²⁾。しかし、これら二つの側面は、プロテイノスの著作である『エンネアデス』において判然と区別されて述べられてはいるわけではない。むしろここでは両側面が複雑に絡まり合う形で叙述が進められている。とりわけ、小論で取り上げる「魂の降下」に関しては、後にふれるように魂という語に含まれる意味の多様さとも相まって、プロテイノスの叙述自体がわかりにくいものとなっている。そこで小論では、魂の降下についてプロテイノスが

語るとき、それがどのような文脈の中でなされ、問題とされているのかを考察してみたい。

プロテイノスは、「魂の身体への降下について」という表題の付された『エンネアデス』IV、8、1冒頭において自分がしばしば身体の眠りを脱して自己自身に目覚め、他のすべてのものから脱却して自身の内部へと入り込み、驚嘆すべき美を観ることがあり、その神秘的なものと合一したと、自己の合一体験を叙述している。ポルフュリオスの『プロテイノス伝』(第二三章)によれば、プロテイノスはポルフュリオスが彼のもとにいた五年の間だけでも四度神秘的なものと合一に到達したのであるが、IV、8、1のこの箇所は、『エンネアデス』の中でプロテイノスが自己の体験について直接語っている唯一の箇所である。そして、魂の降下についての問いは、神秘的なものとの合一状態から通常の状態へともどる過程において発せられる⁽³⁾。

魂はどうしてここに降ってきたのか、どうして私の魂はこの身体

の内にあるのか。自己の体験に基づいたこうした問いには、われわれの魂は神的なものと合一しうるものであるのに、なぜ降下してきたのか、という個々の魂の降下についての一般的問いが含意されている。

二 魂の降下の二つの側面

プロテイノスはこの問題を探究する手がかりを得るために、古人の言葉にあたり、ヘラクレイトスやエンペドクレス等を引合いに出すが、最終的に彼がよりどころとするのは、「神のごときプラトン」と彼が讃えるプラトンの言葉である。⁽⁴⁾

しかし、プロテイノス自身が認めているように、プラトンもその著作の中で常に魂と身体とのかかわりについて一貫した主張をしているわけではない。むしろ、プラトンの著作そのもののうちに含まれる矛盾が、そのままプロテイノスの問題となっているとみることもできる。まずプロテイノスが引くのは、「魂は身体という鎖につながれている」、「魂は身体のうち埋葬されている」、「魂は身体という牢獄のうちにある」、「魂の降下は翼の喪失のためである」といった『パイドン』や『パイドロス』のなかにみられる言葉である。⁽⁵⁾

ここでは逐語的に引用されているわけではないが、プロテイノスは『パイドロス』の名を實際に挙げて言及している。プロテイノスは、これらの言葉においてプラトンが感覚的なものを軽蔑し、魂の身体との交わりを非難していると指摘する。しかし、他方、プロテイノスは『ティマイオス』の名を挙げ、そこにおいて、プラトンが「宇宙は幸福なる神であって、魂は善なる制作者によって宇宙に与

えられた」と述べていることを指摘し、『ティマイオス』の叙述からみるかぎり、宇宙靈魂に関しては宇宙という身体への降下は非難されるべきこととは見なされておらず、われわれ各人の魂も、この宇宙が完全なものとなるために神から宇宙に遣わされたことになる⁽⁶⁾と述べている。そして、その理由として、知性界にいるのと同じ種類の生き物が感性界にも存在しなければならない⁽⁶⁾ことを挙げて

プラトンの著作自体に含まれるこうした一見矛盾する二面、すなわち魂の身体との交わりを非難する面と、個々の魂は宇宙を完全なものとするために遣わされたとする面とをどのように解釈し、調停すべきかということが当面のプロテイノスの問題となる。これは、自らの著作をプラトンの教説の解釈と位置づけているプロテイノスにとつては、避けがたい課題であったとも言えよう。魂の降下についての問いの発端が彼自身の体験に基づくものであり、さらにプロテイノス自身が述べているように、彼は「われわれ各人の魂」について学ぼうとしてプラトンに目を向けたわけであるが、その問いはどうしても魂一般についての問いと重なり合わざるを得ないことになるのである。

三 <εἶδος>の意味するもの

ところで、プロテイノスは、魂(ψυχή)という言葉をいくつかの意味で用いている。IV、8においては、魂の降下が宇宙靈魂と個々の魂との対比において論じられているが、両者がどのような関係にあるのかは明確に示されていない。『エンネアデス』中

の他の論稿もあわせて、ギリシア語〈*ψυχή*〉に関する用例をみると、およそ次の三つに区分できる。(1) 〈*τὸ πνεῦμα ψυχή*〉⁽⁹⁾、(2) 〈*ἡ ψυχή ψυχή*〉、〈*καὶ ψυχή*〉⁽¹⁰⁾、(3) 〈*ψυχή ἕρτα νόσ*〉⁽¹¹⁾である。(1)は万有を支配する宇宙靈魂であり、(2)はわれわれ各自のうちにある個々の魂を意味しており、さらに(3)は、三つの原理的なもの一つとしての、つまりヒュポスタシスとしての魂をさす一応考えられる。プロティノスにおいては、以上のような少なくとも三つの意味で〈*ψυχή*〉という語が用いられている⁽¹²⁾。しかし、例えば個々の魂については常に〈*τὸ πνεῦμα ψυχή*〉という表現が当てられるというように、意味するものによって用語上の明確な区別がなされているわけではない。ヒュポスタシスとしての魂を表す際にも、(3)に示したように「ヌース」との関係が提示される例はむしろ稀である。さらにこのほかに、すべての魂の一体性を強調する場合には〈*ἀθάνα ψυχή*〉、〈*ἀθάνα ψυχή*〉といった表現が用いられることもあり、これがヒュポスタシスとしての魂、あるいは宇宙靈魂を意味することもある。しかしこれら三つがどのような関係にあるのかも明らかだとは言いがたい。

ポルフェリオスによる執筆順序に従えば、魂に関する論考ではIV、8に続いて著されたとされるIV、9「すべての魂は一体をなしているか」において、プロティノスは「すべての魂は一つである」と主張している。ここでは宇宙靈魂と個々の魂との関係について二つの可能性が提示されている。一つは、個々の魂が宇宙靈魂に由来するから、すべての魂は一つだということであり、いま一つは、宇

宙靈魂も個々の魂も別のもう一つの魂から生ずるからだという⁽¹⁴⁾ことである。だが、このIV、9においてはプロティノスは自分がどちらの立場を取るかを明らかにしてはいない。しかし、これらの二つのうちのどちらの見方を取るかによって、ヒュポスタシスとしての魂の位置づけも変わってくることになる。すなわち、個々の魂が宇宙靈魂から生じたとすれば、宇宙靈魂はヒュポスタシスとしての魂と同一のものであるということになり、宇宙靈魂と個々の魂は親子の関係にあると見ることができ、宇宙靈魂は存在の階層上個々の魂よりも上位にあるということになる。それに対し、宇宙靈魂も個々の魂も別のもう一つの魂から生じたとすれば、宇宙靈魂と個々の魂はいわば同じ親をもつ姉妹ということになり、存在の階層の観点からすれば、同位にあることになる。

プロティノスは、「魂の諸問題について、第一篇」と題されたIV、3の第一章から第八章において、IV、9で提示されたこの問題を再度考察している。IV、3、6では、われわれの魂と宇宙靈魂とが同類(*γένος*)⁽¹⁵⁾だと言われ(一行)、同章ではさらにわれわれの魂と宇宙靈魂とは姉妹の関係にあるとされている。図式的に言うならば、まずヒュポスタシスとしての魂があり、そこから宇宙靈魂と個々の魂とが同類のいわば姉妹として生ずることになる。しかし、この図式が『エネアデス』中の他の論考における魂に関する叙述に常に該当するわけではない。特に「ト・ヘン」からの発出を論じた文脈においては、個々の魂についての言及はほとんどなく、またヒュポスタシスとしての魂と宇宙靈魂との区別がはっきりしないまま、議論が進められているのである。例えばIII、8(ヒュシス、テ

オーリアー、ト・ヘンについて)やV、1(「三つの原理的なものについて」)における宇宙の生成に関する叙述を総合すると、「ト・ヘン」からの発出の過程は、「ト・ヘン」↓「ヌース」↓「プッシュケー」↓「ビュシス」という系列で説明されていると理解することができる。この場合、ヒュポスタシスとしての魂の他に、そこから生ずるものとして宇宙靈魂が考えられているわけではなく、むしろヒュポスタシスとしての魂と宇宙靈魂とが同一視され、さらにその下位の部分としてのビュシスが考えられ、それが実際に宇宙に入り込んで行くときれているのである。

魂についてのこれら二つの説明の仕方をどのように理解すればよいのであるか。一つの見方としては、NellorやRistのようにヒュポスタシスとしての魂と宇宙靈魂とは同一であるとするこもできるであろう。しかし、そのように理解した場合、先のIV、3、6における宇宙靈魂と個々の魂は姉妹であるという叙述の説明がつかなくなってしまう。だが、逆にヒュポスタシスとしての魂から宇宙靈魂と個々の魂が生ずるということを重視した場合、「ト・ヘン」からの発出の過程にはいま一つの段階が加わることになるが、そうした説明が該当すると思われる箇所は見いだせない。

宇宙靈魂と個々の魂とがいわば姉妹であり、すべての魂は一つの魂から生ずると言われる場合、そこで強調されているのは、宇宙靈魂と個々の魂との同類性だと考えられる。このことは、V、1、2においても、「宇宙靈魂とわれわれの魂とは同類である」と明確に言われている。⁽¹⁸⁾さらにV、1の同箇所において注目されるのは、後にふれるように、この宇宙靈魂との同類性を基盤としてわれわれ各

自の魂の根源への還帰の可能性が示唆されている点である。V、1では、われわれ各自が自己を忘れ、父なる神を忘却してしまったことが根源からの離反の原因とされ、「われわれ各自のうちにある個々の魂の出自と価値とを教え、想起させる」ロゴスが展開されてくるのであるが、そのロゴスが有効であるのは個々の魂が宇宙靈魂と同類であるからだと考えられる。すなわち、個々の魂の根源への還帰の可能性、換言すれば、われわれと「ト・ヘン」との合一の可能性は、もっぱら魂が全体として一であり、個々の魂が宇宙靈魂と同類であるということにかかっているのである。プロティノスは基本的にはい、わば後者の姉妹関係の図式で魂の関係を考えていたように思われる。⁽¹⁹⁾一方で、「ト・ヘン」からの発出の過程を述べる場合には、その過程で生じてくる存在の階層を際立たせるために、プロティノスは、ヒュポスタシスとしての魂と宇宙靈魂とを同一視するような仕方、宇宙の生成を説明しようとしているのではないであろうか。つまり、プロティノスは、われわれ各自の根源への還帰を述べようとする限り、宇宙靈魂と魂との同類性を基本とした図式を取りながら、宇宙の生成を説明する文脈において、魂間の関係をより単純化した形でヒュポスタシスとしての魂と宇宙靈魂とを同一視していると考えられるのである。

四 魂の降下——宇宙靈魂と個々の魂との対比

IV、8において魂の降下が論じられる場合、そこには四通りの関係、すなわち宇宙靈魂と宇宙、個々の魂と個々の身体、宇宙靈魂と個々の魂、宇宙と個々の身体という四つの対応関係が含意されてい

ると考えられる。もし、宇宙靈魂と個々の魂との同類性を徹底させるならば、同一の魂から生じながら、なぜ一方は宇宙の支配にまわり、もう一方は個々の身体を支配することになったのか、という問題が生ずることになるのである。

宇宙靈魂には宇宙が、個々の魂には個々の身体が、それぞれ支配すべきものとして割り当てられている。プロティノスは、まず、支配される側の違いによって宇宙靈魂と個々の魂の支配の仕方が異なることを指摘し、そうすることによって両者の働きが異なることを明らかにしようとする。個々の魂が支配する個々の身体は、宇宙に比べれば劣ったものである。それは、個々の魂が支配しないならば、各構成要素がそれぞれ固有の場所に散っていつてしまうのであり、それを支配するために個々の魂は身体の中に深く沈み込まなければならぬ。身体のうち沈み込まなければならぬということは繰り返し言われるが、これは、個々の魂が個々の身体を支配するためには、それが劣ったものであるだけに、いっそう密接にかかわらざるを得ないということを意味していると考えられる。

それに対し宇宙の方は、完全に充足しており、自足的なものであって、自己の本性に反するものは何も有していないとされている。ここでは、「宇宙から出て行くものも、また宇宙に入ってくるものもない」という『ティマイオス』(83b9-10)の言葉が引かれ、宇宙の自己充足性が強調されている。この点で、われわれ各自の身体が欠乏やその他多くの困難にあって、多くの助けを必要とすると言われているのとは対照的である。したがって、宇宙を支配する宇

宙靈魂も、宇宙に深くかわる必要はなく、プロティノスの言葉によれば「いわば短い命令の言葉」を発するだけでよかったのである⁽²¹⁾。言い換えれば、宇宙靈魂は宇宙を支配するために、そこに降下し、入り込む必要はなかったのである。逆に言えば、個々の魂も、個々の身体へと降下し、その中に入り込むことがなかったならば、宇宙靈魂と共に宇宙を支配することができたはずなのである。プロティノスが個々の魂も宇宙靈魂と共に降下せずにいられたはずだと述べるとき、それは、先にふれた宇宙靈魂と個々の魂とは同じ親から生じた姉妹であるという発想がすでに含意されていると考えられる。だからこそ、かえってなぜ個々の魂は個々の身体の内而降下したのか、ということが問題になってくると言えよう。

ここで注目されるのは、個々の身体に何かを可能にする力を与えること自体は、魂にとつて悪しきことではない、と言われている点である。プロティノスによれば、より優れたものが劣ったものに配慮すること自体は、⁽²²⁾配慮する側が最善の状態を維持することを妨げはしないからである。この観点からすれば、宇宙靈魂であれ個々の魂であれ、より劣ったものである身体に対して配慮することは悪ではないことになる。それならば、なぜ魂の降下が問題になるのであるか。

そこで、プロティノスは劣ったものに対する配慮の仕方として二通りの例を挙げてくる⁽²³⁾。それは、言ってみれば間接統治と直接統治の違いということになる。すなわち、一つは王にふさわしい労働の少ない統治の仕方、ただ命令することのみによってすべてを秩序づける仕方であり、いま一つは、統治する者が自己の何らかの働き

かけによって行為の対象に直接接触れる仕方である。後者の場合は、働きかける側は働きかける対象の本性によって汚染されると言われている。前者の例は宇宙靈魂と宇宙との關係に相当し、後者の例は個々の魂と個々の身体との關係に相当すると考えられる。王にふさわしい間接統治とは、自らは上方に位置してそこにとどまりながら、末端の力を宇宙の内部へと送るといふ表現で言い換えられている。この場合、宇宙靈魂はより劣ったものである宇宙の内に直接入り込むことはなく、「降下」といふ言葉も用いられていない。また、プロティノスは、宇宙に関して、「魂の入り込み」や「魂の賦与」といった表現は教説を明らかにするための思考上の手段だとも述べている。ここで言われている「末端の力」とは、IV、8においてはこれ以上説明されていないが、上述の宇宙の生成の過程の図式と照らし合わせるならば、宇宙靈魂の下位の部分としてのピュシスに相当すると言えるであろう。例えば、III、8、3の叙述によれば、ピュシスは宇宙靈魂の下位の部分とされ、ある種の生命であり、ロゴスであり、自然物を作る力であるといわれている。宇宙靈魂が宇宙を支配するといつても、それは決して宇宙靈魂が直接宇宙に入り込むということの意味しているわけではない。それゆえ、宇宙靈魂は質料的なものに直接接触れることはなく、常にその本性に沿ったあり方をしていと言われるのである。魂にとつて本性に沿ったあり方とは、自己より上位のものに目を向け、テオリアーをなすことによつて、より下位のものを生み出していくといふ産出の原則に従っていることを意味するであろう。⁽²⁷⁾

魂と身体との交わりは、思惟活動の妨げになるといふこと、なら

びに魂が快樂や欲求や苦痛に満たされるといふことのゆえに厭われると言われている。⁽²⁸⁾しかし、宇宙靈魂は、それが支配する宇宙が充足したものであるがゆえに、その中に沈み込んで直接それにかかわる必要もなく、下方に傾くこともない。すなわち、宇宙靈魂は先に述べたように、直接手を下すことなくこの宇宙を秩序づけながら、永遠にかのもの、つまりより上位のものの方に向かっていのである。したがって、IV、8においても、宇宙靈魂については、「降下」といふ表現は用いられておらず、宇宙との關係を述べるにあたっては、「統治する」(domare)あるいは「秩序づける」(regere)という語がもっぱら用いられている。他方、「降下」に相即する過程としての「上昇」(adigas, adigascens)にあたる表現も宇宙靈魂については見いだされないのである。

これに対し、プロティノスによれば、個々の人間の魂は、身体のうちに深く沈み込んでいるために、身体においてあらゆる悪しき影響を受け、労苦や欲望、恐怖といった様々なことを味わうことになる。これはまさに魂と身体との交わりが厭われる理由となるものである。それゆえに、プラトンは、身体は個々の魂にとつて鎖であり、牢獄であり、墓であると述べたのだ、とプロティノスは解釈する。彼によれば、宇宙靈魂と個々の魂とは降下の理由(厳密に言えば宇宙靈魂については「降下」といふ語を用いるべきではない)が異なるのであるから、冒頭にふれたプラトンの魂と身体とのかわりに関する言明は決して矛盾するものではないといふことになる。⁽²⁹⁾

では、宇宙靈魂と個々の魂それぞれの降下の原因とは何であろう

か。

五 降下の原因

宇宙靈魂はこの文脈では、先にみたようにヒュポスタンスとしての魂と同一視されていると考えられるが、その宇宙靈魂が知性界にとどまって降下せず、何らかの力を遣わすという仕方宇宙を支配するとしたら、知性界にある限りでは上位のヒュポスタンスである「ヌース」と何ら変わるところがないのではないだろうか。

そこに導入されてくるのが階層秩序の必然性という観点である。

プロティノスによれば、たしかに魂のより知性的な部分は思惟活動をなすが、魂の働きは思惟することだけではない。魂は思惟にかかわるばかりではなく、別の働きも有しているものであり、その限りにおいて「ヌース」としてとどまり得なかつたと言われている。⁽³⁰⁾ 宇宙

靈魂は一方で自己よりも先にあるもの（「ヌース」）に対して目を向け、それを思惟し、他方、自己自身に目を向けることによって自己の後にあるものを秩序づけ、支配し統治するとされており、いわば二つの顔をもっている。すなわち、知性界と感性界の接点に位置すると考えられる。それは、換言すれば、すべてのものが知性界にとどまることは不可能だということである。プロティノスによれば、より先のあるものがある限り、それに続くものが生じるのであり、たとえ劣ったものであっても、その秩序に従って必然的に存在することになる。宇宙靈魂にとっての降下、すなわち自己の末端の力を宇宙に送り込んでそれを賦活することは、こうした階層秩序の必然性に基づくものであり、源泉からの無限の流出や樹木の根からの栄養の

供給にたとえられる「ト・ヘン」からの発出の一端と見なされるのであって、その限りでは決して悪しきことではない。プロティノスが『ティマイオス』の名を挙げて言及しているのはこの側面に当たると言える。

それに対し、個々の魂の場合はどうか。

個々の魂も知性界にとどまっているときには宇宙靈魂と共に悩みのない生活を送り、共に宇宙を支配すると言われている。⁽³¹⁾ こうした叙述は、先にふれた両者の姉妹関係を基盤としてなされていると考えられる。そして、われわれ各自の内にある個々の魂は本来身体と交わりを持つべきではなく、全体の魂と一体となっているはずであると考えられていると言えよう。

では、なぜ個々の魂はこうしたいわば幸福な状態から離れ、個々の身体へと降下することになってしまったのであろうか。

一つには、個々の魂に割り当てられた個々の身体が劣ったものであるがゆえに深く沈み込まなければならなかったということがある。だが、もしそれだけであるならば、降下は宇宙の生成の過程の一端と見なされるに過ぎず、魂にとっての悪とまで言われることもないであらう。劣ったものであるという個々の身体の側の条件のみで宇宙靈魂とは異なる支配の仕方、つまり身体への降下が定められているわけではない。むしろ個々の魂は、単に宇宙の生成の過程として降下するのではなく、結果的には個々の身体を支配することになるにせよ、別の契機から降下すると見なされているのではないであらうか。

個々の魂の降下は全体からの離反ととらえられている。⁽³³⁾ プロティ

ノスによれば、個々の魂はいわば他と共にあることに疲れ、全体から部分へと向きを変え、自己自身に属し、自己自身へと向かおうとする。これは全体からの逃亡であり、離反であって、知性的なものの方へは目を向けず、部分となって孤立し、弱められることである。全体からの離反とは、⁽³⁴⁾全体の魂との幸福な生を離れ、個々の身体へと進んで行くことを意味する。個々の魂が降下していく個別の身体は、あらゆる仕方であらゆるものから攻撃を受けているとき、そこへ入り込むことによって個々の魂もまたその混乱へと巻き込まれることになる。これが個々の魂が降下によって引き受けなければならぬ状態なのである。

こうした個々の魂の全体からの離反については、V、1、1において、別の言葉で述べられている。V、1、1の冒頭において、プロティノスは、われわれの魂 (*psuchai*) が父なる神を忘れてしまった原因は何か、という問いを提起する。「父なる神」の忘却とは、個々の魂が自己を忘却しているということと並べて言及され、それはまず魂の自己忘却という形で見いだされることになる(一—三行)。このような状態が、先のIV、8の叙述に即して言えば、個々の魂の全体からの離反であり、身体のうち深く沈み込んだ状態だと考えられる。さらに、V、1、1では、魂の自己忘却、ひいては「父なる神」の忘却を惹き起こした原因として *egothen* ということが言われてくる(四行)。プロティノスはこの語を否定的な意味で用いており、「向こう見ず」、あるいはもっと強く「傲慢さ」と言ってもよいかも知れない。ここでは *egothen* は個々の魂にとつての悪の始まりと言われている。さらに *enim* は、「生成」ならび

に「最初の差異」だとされており、この点でも全体からの離反と符合している。

しかし、*egothen* をわれわれ各自のうちにある個々の魂の自己忘却の原因として捉えた場合、注目されるのは、それが *ego psuchikon* ⁽³⁵⁾ *enim* といわれている点である。これは *egothen* の具体的内容を示していると考えられる。つまり、個々の魂は何か他のものに依存することなく、言い換えれば、自己の本来の起源との関わりを顧慮せずに、自らの意のままにふるまうことを望むのであり、このことはさらに *enim egothen* という語によって表される。すなわち、自己の本来のあり方を忘却してしまった個々の魂は、自己の意のままにふるまうことを享受するという状態になっているのであって、そのような状態にあること自体、すでに「父なる神」から遠く離れてしまっていることを意味しているのである。そして、このような状態が続く限り、個々の魂は自己の起源からますます遠く離れてしまおうとされている。身体のうち降下した個々の魂は、*egothen* による自己忘却によって、自己の起源から離反し、またそのような離反によってますます起源の忘却から脱却できなくなるといふ悪循環におちいっており、これが、身体という牢獄に閉じ込められていると言われる状態をさすと考えられるのである。⁽³⁶⁾

この *egothen* による起源からの離反ということが、個々の魂の降下が宇宙靈魂の場合と大きく異なる点である。宇宙靈魂は「虚栄や思い上がり」⁽³⁷⁾ *tolma* から宇宙を支配しようとするのではない。それに対し、個々の魂は他に依存せず自己自身であろうとして個々の身体へと降下し支配しようとする。だが、一面においては、個々

の魂の降下は「宇宙の完成のための降下」であり、必然であると見なされており、繰り返し述べてきたように「ト・ヘン」からの発出の一端としてとらえられるのであって、プロティノスは、結局この二つの面を調停することができないまま並存させているのである。否、むしろ個々の魂の降下についてこれら二面が並存しているところに、宇宙の部分でありながら根源へと還帰しようとする人間の特異な位置づけの根拠が求められるのではないであろうか。

六 根源への上昇の可能性

魂の降下についての問いがプロティノス自身の合一の体験に端を発したものであることからわかるように、彼の主要な関心が個々の魂の降下に向けられていることは明らかであろう。さらに注目を要するのは、「個々の魂」ということが言われるのは、もっぱら人間についてのみであるということである。プロティノスによれば、宇宙は一つの巨大な生き物であり、天の星々から人間や他の動植物、大地に至るまで宇宙靈魂の支配下にある。しかし、人間のものは、一面では生き物として宇宙靈魂の支配下にありながら、他面、宇宙靈魂と同類とされる個々の魂を有することによって、より高次のものとして存立している。人間は、宇宙の部分として宇宙靈魂によって賦活されると同時に個々の魂も有していると思われることができ、いわば二重の意味で魂を有するのである。そして、われわれ各自の根源への還帰の可能性を探ろうとするにあたって、繰り返し主張されてくるのが、個々の魂は身体のうち沈み込んでいるとしても、上位のものとのつながりが切れてしまうわけではない、という

ことである。

先にみたようにIV、8においては宇宙靈魂との対比によって議論が進められてはいるが、プロティノスの力点は宇宙の生成について論ずることではなく、身体のうち沈み込んだ個々の魂の状態を明らかにすることに考えられる。その場合、プロティノスが強調するのは、「個々の魂は自身の内に沈み込んではいても、なおこの世界を超越する部分を保持している」ということである。例えばそれは両棲類になぞらえられている。すなわち、個々の魂は知性界と感性界の両方に棲む生き物と見なされているのである。魂は、すべて身体にかかわる下位の部分とヌースにかかわる上位の部分をもっていると言われる⁽⁴⁰⁾。

また同じく魂の身体への入り込みを論じているIV、3においても、個々の魂は自分たちの根源やヌースから切り離されたわけではないとされている⁽⁴¹⁾。われわれ人間の魂は、身体のうち沈み込んだとしても、その頭は天上にかかげられているのである。同様の比喩はV、1、1においてもみられる(二二―二四行)。こうした個々の魂の状態は、それ自体は降下することのない宇宙靈魂との同類性に集約されると見なすことができる。

ここでもう一度V、1に目を向けるならば、ここでは個々の魂と同類である宇宙靈魂の宇宙への入り込みの過程を体験することによって、個々の魂に自己の出自と価値とを気づかせ、想起させるロゴスが展開されている。降下に関する叙述は、個々の魂に自己の出自と価値を教え、想起させるロゴスの一環となさされていると考えられる。その意味では、宇宙靈魂についての叙述もそれを助ける

手段に過ぎない。宇宙の生成の過程に思いをいたし、その過程を廻行することによって、個々の魂は自己の出自と価値を見いだしていく。それゆえにこそ、プロティノスにおいては「魂は形而上学的世界の彷徨者」であると特徴づけられるのであらう。⁽²²⁾魂の降下が語られる文脈はⅤ、1、1で言及されているこうしたロモスに即したものを考えられるのである。

【付記】『エッセイニクス』のテクニクの数々 Oxford Classical Texts 所収の Henry-Schwyzler 版に於て。

註

- (1) Zeller, E., Die Philosophie der Griechen, III, ii⁴, Leipzig, 1903, S. 473.
- (2) 原々々 Brehier 氏『*Le problème philosophique*』*宗教と* (Le problème religieux) 所持論のた (cf., Brehier, E., *La philosophie de Plotin*, Paris, 1928, p. 23) 実々 Kristeller 氏『*宗教と* (gegenständiglich) *宗教と* (aktual) *と* (cf., Kristeller 氏『*Plotin*, Tübingen, 1929, S. 5.) 々々 Schwyzler 氏『*Plotin*』*と* (cf., Schwyzler, H.-R., Die zwiefache Sicht in der Philosophie Plotins, *Museum Helveticum*, 1, 1944, S. 87-99, bes. S. 90.
- (3) 某々の瞑想の意と魂の對なるに於ては『*神話*

ものうちに静止した後にもヌスから推理的思考へと降ってくる、と言われているのである。ここでは立ち入らないが、神秘体験の構造自体を問題にする場合、上昇・合一の過程のみならず、そこからの降下の過程も大きな意義を持つと考えられる。井筒俊彦『*神秘哲学*』第二部、人文書院、一九七八年、二二一ページ参照。

- (4) IV, 8, 1, 23.
- (5) IV, 8, 1, 27-40.
- (6) IV, 8, 1, 40-50.
- (7) V, 1, 8, 12-14.
- (8) IV, 8, 2, 1-3.
- (9) IV, 4, 6, 7; IV, 4, 17, 36, passim.
- (10) <η ημετέρα ψυχή> ……V, 1, 10, 11; IV, 7, 8², 7, passim. <αί ψυχή> ……V, 1, 1, 26; V, 8, 10, 18, passim. 々の原々々『*宗教と* (ψυχή ημάς) (II, 9, 2, 4) 々の表現の原々々。
- (11) II, 9, 1, 15.
- (12) Cf., Blumenthal, H., Soul, World-Soul, and Individual Soul in Plotinus, *Le neoplatonisme*. Paris, 1971, pp. 55-63. 々々『*宇宙と魂の位階の部分*』のユリノスと合々の『*ψυχή*』への語は四魂の意味なるが、そのユリノスと合々の原々々 cf., Emilsson, E. K., *Plotinus on Sense-Perception*, Cambridge, 1988, pp. 23-24.
- (13) IV, 3, 6, 12; III, 2, 4, 10-11. cf., Blumenthal, op.cit., p. 58.
- (14) IV, 9, 1, 10-13.

(15) IV, 3, 6, 13.

(16) ただし、V、1でおおつては、宇宙靈魂による宇宙の賦活に
しつづの言及はみられないが、ロマンズについてはいずれも
なす。

(17) Cf., Zeller, op. cit., S. 538 ; Rist, J.M., *Plotinus : The
Road to Reality*, Cambridge, 1977, p. 113.

(18) V, 1, 2, 44.

(19) Cf., Blumenthal, op. cit., p. 58.

(20) IV, 8, 2, 8.

(21) IV, 8, 3, 14-16.

(22) IV, 8, 2, 24-26.

(23) IV, 8, 2, 27sqq..

(24) IV, 3, 9, 12-18. プロティノスによつては、「*テ・ケン*」か
らの発出は永遠に絶え間なくなされるものであつて (cf., V, 1, 6,
38-39)「宇宙への魂の賦与もその一端であり、時間的にとらえ
ることはできなす。また、宇宙が宇宙としてあるためには宇宙
靈魂によつて賦活されなければならぬのであるから、魂を欠
つた宇宙などというものは考えられなす。

(25) III, 8, 3, 9-10 ; 15.

(26) IV, 8, 2, 35sqq..

(27) V、1でおおつては、父と子や原型と似像のイメージを用
つて「*テ・ケン*」からの発出の過程が説明されているが、特に第
六章における動詞 (<εβαλιω>) を用いた説明から、「上位のもの
が自己より劣つたものとして下位のを生み出す」という形

で「産出の原則」として定式化できると思われる。また産出の
契機としてのテオリアーについては、III、8の第三章、第七
章等を参照。

(28) IV, 8, 2, 45.

(29) IV, 8, 3, 1-6.

(30) IV, 8, 3, 25.

(31) III, 8, 10, 4-14.

(32) IV, 8, 4, 5sqq..

(33) IV, 8, 4, 13.

(34) *ロジック* (<φύσις φυσική>) という言葉が用いられているが、
大抵からつて宇宙靈魂を指すと考えられる。

(35) V, 1, 1, 5.

(36) *ロジック*は立派な入らうはなすながら、「<εξιζωα>」は、III、1
—c 等で論じられている運命と人間の自由とをどうとらえるか
とつづの問題とからめて考察する必要があると思われる。

(37) II, 9, 11, 21-22.

(38) IV, 4, 32, 4-5, passim.

(39) IV, 8, 8, 1-2.

(40) IV, 8, 8, 12.

(41) IV, 3, 12, 1-5.

(42) Inge, W.R., *The Philosophy of Plotinus* 2 vols. London,
1929, p. 203.

(かない・たじ) 筑波大学哲学・思想学系助手)